

# 『隔賞記』にみる仏師康知・康看

—江戸時代七条仏師動向の一資料—

張 洋 一

## はじめに

近年、各地での仏彫彫刻調査の進展に伴い江戸時代仏彫彫刻を研究する動きが出てきた。しかし、運慶以来の慶派仏師の系譜を継承し、江戸時代造像界をリードした七条仏師の動向についての研究は、あまり進んでいない。これはいい難く未だ不分明な点が多い。

七条仏師の系譜・業績に関する資料としては、個々の彫刻作品のほか『大仏師系図』諸本<sup>①</sup>などがこれまでに紹介されている。このほか近世の日記・記録類を初めとする文献資料にも、仏師や造像に関する記事が散見できる。これらの記事は、断片的ながら『大仏師系図』諸本の内容を補綴するばかりでなく、事蹟の間隙を埋め近世仏師の動向を知る上で見過ごしえぬものと思われるが、江戸時代仏彫彫刻に対する関心の低さからかこれまで十分に紹介されていないのが現状である。

ここに取り上げる『隔賞記』<sup>②</sup>は、周知の通り鹿苑寺第四世鳳林承章が、寛永一二年（一六三五）から寛文八年（一六六八）死去するまでの三四

年間に亘って書き綴られた日記で、そこには狩野探幽、野々村仁清を初めとするいわゆる寛永文化を主導した人々との交遊が随所に書き留められ、江戸時代初期の文化を知る上での基本史料として夙に有名である。

『隔賞記』についてはこれまで様々な角度からの考察が行われているが、<sup>③</sup>仏師や造像記事に関しては触れられることはなかった。

そこで小稿では『隔賞記』に登場する仏師の動静や造像記事についての検討を行い、江戸時代彫刻を考察する上での一資料を提示することとしたい。

## 一 『隔賞記』にみる七条仏師の系譜

鳳林承章は文祿二年（一五九三）勤修寺晴豊の第六子として生まれ、相国寺住持西笑承兌に師事し、承兌没後は北山鹿苑寺住職に任じられ、寛永二年（一六二五）には相国寺九五世住持となった禅僧である。鳳林は鹿苑寺に生活の基盤をおき、相国寺境内に晴雲軒を構えて法務に携わった。またその出自から後水尾院とは姻戚関係にあたるため、公家衆と

表1 『隔黄記』掲載の仏師

年	日	場所	職名	備考
寛永21年 (1644)	5・1			伝右衛門入道友運
	5・10			友盛 (運)
	5・17			友盛 (運)
正保2年 (45)	3・2	左京		
3年 (46)	5・22	左京		
慶安元年 (48)	7・13	左京		
2年 (49)	9・15		治部卿法橋	
	1・6		治部卿法橋	
3年 (50)	7・25		治部卿法橋	
3年 (50)	1・6	左京法橋	治部卿法橋	
承応2年 (53)	8・23		康看	
	10・20		治部卿入道康看	
	10・28		康看	
	11・9	左京	康看	
	11・22	左京	康看	
	12・9	左京	康看	
	12・10	左京進	康看	
3年 (54)	1・2	左京法橋	治部卿	
	3・7	左京法橋	康看法眼	
	12・12	左京	康看	
4年 (55)	1・2	左京	康看	
	2・26	左京法眼	治部卿法橋	
	2・27	左京法眼	康看	
	4・6	左京法眼	康看	
	4・8	左京法眼	康看	
明暦元年 (55)	9・24	法眼左京	治部卿法橋	
	11・26	法眼左京	康看法眼	
2年 (56)	1・2		治部卿法橋	

の交際も頻繁に認められる。

従って、『隔黄記』掲載の仏師、造像に関する記事は、鹿苑寺、相国寺あるいは後水尾院に関する事項が多く、表1で示すように寛永二十一年(一六四四)から寛文八年(一六六八)までほぼ毎年ならかの記述が確認できる。

『隔黄記』に登場する仏師名は、次の通りである。

- ① 伝右衛門入道友運〔雲〕
- ② 右京
- ③ 左京
- ④ 康看
- ⑤ 治部卿
- ⑥ 式部卿

このほか左京の弟子である功之介、右京の子息六兵衛が登場するが、彼等に直接関わる記述がないため、今は検討から除外する。

掲載の頻度は左京、康看、治部卿が最も多く、次いで右京がそれに続く。そのほかの仏師については一〜三回の頻度であり、鳳林との交際の深浅に因るものと推測できる。

ところでここに掲げた友運、康看以外の仏師は、「治部卿」等の官職名や「右京」「左京」といった名で記され、具体的な仏師名を示していない。しかし「治部卿」「左京」については康看との関係を明示した記事があり具体的な仏師名が判明する。

まず治部卿について。治部卿は慶安年間に登場する「治部卿法橋」と承応二年以降にみえる「治部卿」がいる。「治部卿法橋」は後に「治部

8年 (68)	10	9	3	3	7年 (67)	12	8	7	6年 (66)	1	1	1	5年 (65)	4年 (64)	3年 (63)	寛文元年 (61)	4年 (61)	3年 (60)	萬治2年 (59)	4年 (58)	明暦3年 (57)	
1	26	10	22	18	1	23	1	26	1	26	25	15	1	1	1	24	2	27	25	1	1	1
左京			左京	左京	左京	左京	左京	左京法橋				左京	左京	左京		左京	左京	左京法眼	左京法眼	左京法眼	左京法眼	左京法眼
康看																						
															治部卿							治部卿
																						式部卿
		右京	右京	右京	右京	右京						右京										
												六兵衛(右京子)										

卿入道康看」と示されることより康看であることがわかる。

一方「治部卿」は、承応二年一月二二日条に「大仏師康看・同左京・同治部卿也。治部卿者康看息也。予初逢也。」とあつて「治部卿」は康看の子息であると説明している。この時以降、鳳林は二人の治部卿については明確に「康看」と「治部卿」と使い分けており、このことは「治部卿」が後に法橋位に就いたことから肯首できよう。

『大仏師系図』諸本では、康看の子息として康春の名を掲げる。金光寺本・京都国立博物館本『大仏師系図』では康春の肩書を「治部卿法橋」と記しており、このことから「治部卿」は康春に該当するものと思われる。

次に左京。左京は僧綱位や呼称の変化からみて、萬治三年を境に別人の可能性が考えられる。前者は法眼位までのぼった左京で、後者については寛文六年までに法橋位に就いた左京である。

前者の左京は、承応二年一月九日条に「大仏師康看・左京兄弟兩人」との記述がみえ、左京と康看は兄弟であったことが知られる。

今、『大仏師系図』諸本では康看の兄として康音を掲げるが、「宮内卿」と記されており、その他の康看周辺の七条仏師で「左京」を名乗る仏師としては、康正の猶子とされる帥康以と二四代康知があげられる。

『隔賞記』では、左京の事蹟として後述のように相国寺塔本尊像や花園法皇像の制作を掲げており、これらの事蹟は『大仏師系図』諸本ではいずれも康知の事蹟として列記されている。従つて前者の左京は康知であると考えられる。このようにみれば、さきほど僧綱位等の変化から萬治三年で左京を別人に分けたが、美術研究本『大仏師系図』・『金光寺

過去帳<sup>⑧</sup>に記載される康知の没年〔寛文元年一月二日〕からみれば、萬治三年頃に康知は制作の第一線から退いたようにも思われる。

以上の事項を『大仏師系図』諸本の系譜と合わせて考えると、康知は康看と兄弟、つまり康猶の子である可能性が想定できる。

康猶の子女について『大仏師系図』諸本は、嫡子康音、次男康看を掲げることとまるが、『金光寺過去帳』は彼等のほかに元和元年（一六一五）に早逝した宗雲童子、寛永六年（一七二九）に没した照月寿光信女を掲げている。更に京都国立博物館本『大仏師系図』では康春についても脚注で「康猶末子也成『康看之猶子』と述べ、康猶の末子としている。

『隔賞記』においても寛文二年二月八日条には「於芳春、而春歴云浄土僧初知人、大仏師康看弟也。」とあつて康看の弟に浄土宗の僧となつた春歴がいたことが記されている。これらが全て真実を伝えるものとするれば、康猶には康知を含め少なくとも七名の子女がいたことになる。『大仏師系図』諸本にみる康猶以後の系譜については更なる検討を要しようが、『隔賞記』の記述は、日記という性格からみてかなり信憑性が高いものと考えられよう。

このようにみえてくると、後者の左京についても二五代康乗と推測できるが、制作に関わる記事は全く今は確認し得ない。

また右京についても正保二年、慶安二年にみえる右京と寛文五年以降に頻出する右京は別人とも思われるが、今は明確にしがたいためとりあえず同一人物としておく。

以降、纏めると『隔賞記』に掲載される主要な仏師は、七条仏師の康知、康看であり、その事蹟は鹿苑寺や相国寺、後水尾院に関係したもの

であることがわかる。

## 二 七条仏師の動向 —— 康知・康看 ——

では内容について順次検討していきたい。

### 鳳林承章と七条仏師

『隔賞記』における七条仏師の初出は正保三年五月二日条で、この日「守仏観音像」の厨子修理が完成し、金光寺覚持上人より鳳林に贈られた。その折りに左京（康知）の説明として「観音像恵心（源信）之御作之由」と記されている。

この観音像は同年三月二四日に覚持より贈られ、鳳林も「小作之名作也」と賞した像で、厨子は修復後改めて贈られたことが知られる。おそらく厨子の修復は、覚持を介して大仏師康知が行つたのであろう。

慶安元年九月一五日には、治部卿法橋（康看）が金光寺僧衆の仙也と共に初めて鹿苑寺を尋ねている。あいにくこの時鳳林は出京し、対面出来なかつたが、吉権が出迎え、道円作の「朱塗之丸茶入之棗」を渡して入麴と一盞もてなしを受けている。康看は、翌年と翌々年の正月にも年賀の挨拶に伺うが、いずれも鳳林とは対面できず、覚持の忌日に初めて対面している。

以上の記事から鳳林と康知・康看を結び付けているのが、覚持・仙也ら金光寺僧衆であることが窺える。覚持は鳳林と懇意であり、『隔賞記』には二人の交遊を示す記事が頻出する。承応二年六月二日に覚持は亡

くなるが、同年八月二三日条には「内々約束、赴金光寺、而作焼香也。覚持上人今日忌日故也。為香典、孔方五十疋備仏壇也。」と鳳林が金光寺へ甲間に訪れた記事もみえる。

七条道場金光寺は周知のように慶派仏師と深く結び付いた寺院で、寺地はもと定朝の邸宅と伝えられ、更に慶派の歴代大仏師が代々同寺の檀那となっている。その関係は江戸時代に入っても続き、寛永六年（一六二九）には康猶が金光寺に遺る時宗祖師像を修復している。

このことからみれば、七条仏師と金光寺僧の関係は、単に寺僧と檀那との関係に止まらず、七条仏師が当時の有力者に接近していく際に金光寺僧がその仲介の役割を担っていたように思われる。

さて、康知が鳳林と初めて対面したのは慶安元年七月一三日であった。この日鳳林は出京の後、鹿苑寺境内明王院に赴いて毛不動の台座・火焰光背の修補の出来を見聞するが、その折、康知と弟子の功之介に「初相逢」った。その後三人は金閣まで行き足利義満像を拜見している。この時どのような経緯で足利義満像を拜見することになったのかは記されていないが、翌年早々に開始される金閣の修復に伴って正月一七日には「天山（義満）御木像」を鳳林・久蔵主・宗琢・宗閑の四人で仏壇へ移している。この移座に関する相談でもあったのであろうか。

金閣の修復については、義満坐像移座の翌日に大工が来寺し、本尊無量寿仏や仏像を客殿の床間に移して開始されるが、これは建築に関するもので、安置仏像の修復については後日行われる。

### 相国寺塔内本尊像

康知・康看が鳳林のもとで直接造像に携わる事蹟としては、相国寺塔の本尊像の製作が掲げられる。

相国寺塔は、もと足利義満が応永六年（一三九九）に創建した七重大塔であったが、四年後に落雷のため焼失し、翌年には再建されるがこれも文明二年（一四七〇）に再び落雷により焼失してしまう。

後水尾院はこの塔を三重塔として再建することを発願し、承応二年三月一九日には新初めと地撞初の儀式が執行されている。八月一八日には立柱式が行われたが、この時塔内安置の本尊については「疏」の中に塔本尊の仏名がないとして、未だ定まらないとしている。

その後一〇月二〇日条には「昨日大仏師治部卿入道康看被来于北山、大仏白雲門一折持参也。相国寺塔之本尊 今度從 仙洞被 仰付、忝之由、被申来也。」とあり、後水尾院より仏師に塔内本尊像製作の拜命が下り、康看が鳳林にその謝辞を述べに来ている。この頃までには像名が決まったのであろう。承応三年三月七日に行われた入仏供養には、「相国寺塔婆本尊大日如来安座、大仏師左京法眼来、令人仏也。」とあって、塔内本尊像は大日如来坐像であったことがわかるとともに、その制作には康知・康看が共同で携わったことが推測できる。

さて、一〇月二〇日条に記す「昨日」の訪問は、相国寺佛国忌のため鳳林には会えなかった。一〇月二十八日も再度康看が晴雲軒を尋ねるがまたも会えず、ようやく十一月九日に「大仏師康看・左京兄弟兩人」が晴雲軒を訪れ、鳳林と対面している。面談の後、彼等は宗閑藏主を案内

者として相国寺塔頭の慈照院・梅熟軒・雲興軒・心華院の各僧侶へ挨拶に訪れている。

この一連の訪問は、相国寺住持である鳳林と寺務方と思われる塔頭の各僧侶へ挨拶に廻っていることからみて、塔内本尊像製作の拜命への御礼であると思われる。

一月二日には鳳林が法因寺上人、金光寺の僧衆仙也・道眼・増宿・寿宣らと大仏師康看・康春・康知を鹿苑寺へ招いている。大仏師一門のみならず法因寺住持、金光寺僧衆ら時宗の僧も招かれていることから、この招待は造像に関するものではなく、仏事に関係したものと想像できる。この日は金光寺覚持が亡くなって丁度五ヶ月目にあたる。

二月一日には朝から法因寺で茶会が開かれ、鳳林が招かれている。この時康看も相伴している。午後からは大仏師左京進（康知）の邸宅でも茶会が開かれ、出席している。この茶会は書院で行われ、彦首座・法因寺上人が相伴している。亭主は康看で、茶人は春慶塗、掛物は千利休が鳳林の父勤修寺晴豊に宛てた書状であったと記され、なかなか気配りの効いたものであった。茶事後の鳳林は、大仏師家所蔵の書状、書物や智恩院籠靈廟に納める徳川家康、秀忠の両木像を拝見している。

この茶会に対して鳳林は、前日に「富田酉水」両樽を大仏師宅に贈っており、鳳林がしばしば招かれる通常の茶会とは少し趣が異なることに気付く。更に亭主側である康知・康看も本来相国寺塔内本尊像の制作に努めている期間に鳳林を招いて茶会を開いており、いかにも唐突な内容である。

『隔賞記』にみえる相国寺塔内本尊像の制作に関わる具体的な記述は

先に紹介した拜命の謝辞と入仏供養の記事が見えるのみで、その製作過程は全く窺えない。しかしこの大仏師宅での茶会はおそらく塔内本尊像制作に関わるものではなかったかと推測する。

ではいったい制作のどの過程で茶会を開くのであろうか。ここで参考になると思われるのは、大仏師康乗が泉涌寺に調進した四条天皇像の造立過程である。

四条天皇像の造立については『泉涌寺再興日次記』<sup>6)</sup>に詳しい。それによると、寛永六年（一六六六）四月一三日に「四条院真儀之事」は後水尾院自らが大仏師に仰せ付けると知らされ、七月九日には大仏師康乗が参内し、その命を承った。その後一〇月五日に「四条院宸儀御衣木加持」が「大仏師康乗四条之家」で行われた。この御衣木加持は、本来九月二〇日に行われる予定であったが、その日は後光明院御一三回忌にあたり公私多忙のため、この日に延びたとする。御衣木加持の後、「此日康乗奔走之余、於茶室、進濃茶数種」とあり、茶室で大仏師康乗が御導師親景長老を初め泉涌寺の衆僧に茶を進めている。

以上の記事から四条天皇像造立の場合、御衣木加持は製作の拜命から約二ヶ月余の後に仏師宅で行われること、また御衣木加持に参席した寺僧の慰労のため、仏師が茶を進めていることがわかる。

二月一日に催された大仏師康知宅での茶会の場合、康看が謝辞を述べに来寺した一〇月二〇日から二ヶ月近く経っていることや大仏師宅で茶会が開かれていることからみて、この数日前には塔内本尊像の御衣木加持が行われたのではないかと推測する。塔内本尊像の御衣木加持に関する記事は『隔賞記』には見えないが、なんらかの事情で鳳林以外の

僧侶が出席したとも考えられよう。

翌承応三年正月二日には康知と治部卿（康春）が年賀の挨拶に訪れ、三月七日には前述した塔内本尊像の入仏供養が行われた。年賀の挨拶には「左京法橋」とあった康知が、この時は法眼位にあり、また同年一月二日条にみえる康看も法眼位に、翌年一月二日には康春も「治部卿法橋」になっていることから、彼等の叙位は相国寺塔内本尊像製作の功績に対して行われたと思われる。

相国寺塔内本尊像について美術研究本『大仏師系図』は、「同年（承応三年）十二月相国寺寶塔本尊」と記され、完成の時期が『隔賞記』の記述と異なっている。『隔賞記』には一月一七日に鳳林が勸修寺に赴いた折、康看、康知と遭遇した記事を掲載するがそれ以上の事は記されず、異同の理由は明らかでない。

#### 金閣の諸像とそれ以後の康知の事蹟

以上のように鳳林と康知・康看は、相国寺塔内本尊像の製作を介して親交を深めるに至ったが、承応四年二月二六日には金閣の阿弥陀三尊像の修理について相談を受ける。

『大仏師康看雖相招、廿三日持病散々指発之由。依然、大仏師左京被来、相對、閣之本尊・脇立之修補之事令相談、可詭之事也。明日為持、本尊・脇立兩尊可遣大仏師之答也。令同道、赴不動也。大仏師侑夕浪、點濃茗也。』

本尊である阿弥陀三尊像の修復について康看を招いたが、二三日から持病が悪化し、康知が鳳林のもとに赴き、相談を行っている。

『山州名跡志』によると金閣一層「法水院」には像高二尺五、六寸の阿弥陀如来坐像、三尺の観音、勢至の各立像と達磨大師、夢窓国師、大元の各倚像と鹿園殿像が安置されていたと記される。

相談の結果、「法水院」阿弥陀三尊像は修理することになり、明日仏像を大仏師の所へ持って行く手筈となった。翌二七日に阿弥陀三尊像は、台座と共に清首座が付き添って大仏師左京法眼（康知）宅へ運ばれた。一般に仏像の修復は仏師が直接現地まで赴いて修復するのが常であるが、この時は仏像を仏師宅まで運んで修理している。鳳林、康知のどちらかになんらかの事情があったのであろうが、稀な例である。

修理は一ヶ月余で完成したようで、康知より四月六日に修理完了の旨を申し述べて来たので、清首座を大仏師宅まで取りにやらせた。八日には、康知が北山を訪れ「金閣本尊・脇立之居様」を檢分している。

明暦元年（承応四年）九月二三日に鳳林は「後光明院御一周忌之忌仏大勢至菩薩之尊像」を後水尾院より拝領する旨を小坊亞相公（小川坊城俊完）より申し述べられ、翌日にはさっそく御札のため参代し、勢至像は「金閣二重目之岩窟之内」に安置されることになった。

金閣二層「潮音洞」には、既に聖観音像と四天王像が木造岩洞内に安置されており、後水尾院拝領の勢至像はここに納められた。

後水尾院拝領の勢至像については「大仏師法眼左京作之尊像也。」と記され、康知の制作と知られる。美術研究本『大仏師系図』康知の項には「同年（承応三年）十月後光明院御中陰忌仏七体。泉涌寺又般舟院」の記事がみえ、中陰忌仏に引き続いて一周忌之忌仏も康知によって制作されたことが判明する。

表2 『隔賞記』掲載の左京、康看、治部卿関係記事

正保3 (46)	5・22	金光寺覚持より守仏観音像厨子の修理が完成し贈られる。大仏師左京の付言として「此観音像患心之御作之由也」。
慶安元 (48)	7・13	不動院で毛不動の台座・火焰光背を修理中の仏師左京と弟子功之介と初めて会う。その後共に金閣へ行き足利義満像を拝見。
2 (49)	9・15	大仏師治部卿法橋、金光寺仙也と共に来寺。道円作朱塗之丸茶入之瓊一ヶ持参。出京のため不对。
	1・6	大仏師治部卿法橋、年賀礼。扇子三本人栴箱持参。出京のため不对。
	1・7	大仏師へ昨日の礼状を金光寺覚持まで遣わす。
3 (50)	1・6	大仏師左京法橋・同治部卿法橋、年賀礼。左京は扇子二本人杉箱持参。治部卿は扇子三本人栴箱持参。相国寺にいたため不对。
承応2 (53)	8・23	金光寺覚持の忌日のため金光寺に赴く。同寺内で大仏師康看と挨拶。
	10・20	昨日、大仏師治部卿入道康看、北山に来る。相国寺塔本尊制作の仰付けに対しての御礼。大仏白雲門(餅)持参。
	10・28	大仏師治部卿入道康看、晴雲軒に来る。出京のため不对。
	11・9	晴雲軒で大仏師康看・左京兄弟兩人と相对。浮盃。左京は大平茸一折持参。その後、大仏師兩人は宗閑の案内で、慈照院・梅熟軒・雲輿軒・心華院を訪問。
	11・22	法国寺住持と仙也ら金光寺僧衆、大仏師康看・同左京・同治部卿を招く。治部卿は康看の子息で初対面。黄柑一折持参。
	12・9	明日午後到大仏師左京宅へ招かれる予定。大仏師宅へ富田酒一樽を贈る。
	12・10	朝、法国寺で茶之湯振舞。大仏師康看らが相伴。午後より大仏師左京宅で茶之湯振舞。茶事には康看が出席。掛物は千利休より父観修寺晴豊に宛てた書状、茶入は春慶作。茶事後、大仏師家の書物・書状、智恩院籠靈廟納入の家康・秀忠両木像を拝見。
3 (54)	1・2	大仏師左京・同治部、年賀礼。対面し、浮盃。左京法橋・治部共に扇子三本人栴箱持参。
	3・7	相国寺へ赴き、相国寺塔本尊入仏式を執行。大仏師左京法眼参席。
	12・12	法国寺で茶之湯振舞。大仏師法眼康看同席。
	12・17	勸修寺家へ赴く。同所で大仏師康看・同左京と会う。
4 (55)	1・2	大仏師治部卿法橋、年賀礼。扇子三本人杉箱持参。
	2・26	大仏師康看を招くが、廿三日より持病が悪化し、代理として大仏師左京が来る。金閣之本尊・脇立之修補に関して相談。
	2・27	明日、本尊・脇立両尊を大仏師の所まで持って行く予定。明王院で大仏師とともに夕食と濃茶。
	4・6	昨日相談の通り、金閣之本尊阿弥陀・両観音勢至像を台座とも大仏師左京法眼の所まで持参、修理を行う。清首座が同行。金閣之本尊三尊の修補が完成した旨を大仏師左京法眼より申し来たので、清首座を取りにやらせる。



明暦元 (55)	4・8	大仏師左京法眼が北山を訪れ、金閣之本尊三尊の居様を見に来る。出京のため不对。
	9・24	後光明院御一周忌之忌仏大勢至菩薩像を拝領に参院。像は金閣二重目之岩窟之内に安座。大仏師法眼左京作之尊像也。
	11・26	午後法国寺に赴く。大仏師康着法眼・長円此兩人が相伴。
2 (56)	1・2	大仏師治部卿法橋、年賀礼。扇子三本人杉箱持参。寺中礼のため不对。
	1・6	大仏師左京法眼、晴雲軒を訪ね、年賀礼。杉三本人扇箱持参。相对。浮盃。
3 (57)	1・2	大仏師治部卿、年賀礼。扇子三本人杉箱持参。不对。
	1・5	大仏師左京法眼、晴雲軒に年賀礼。扇子二本人桐箱持参。相对。
4 (58)	1・5	大仏師左京法眼、晴雲軒に年賀礼。扇子二本人杉箱持参。相对。
	1・22	大仏師左京法眼、内談事のため訪れる。相对。
萬治2 (59)	1・23	大仏師左京法眼の依頼、中川貞長殿へ書状を遣る。大仏師左京法眼訪問、妙心寺花園法皇像の造営出入につき伝奏甘露寺に申入。
3 (60)	1・27	大仏師左京法眼、北山に年賀礼。扇子箱二本・浅草海苔一折持参。八日に江戸を発ち帰洛。相对。浮盃、濃茶。
4 (61)	1・2	大仏師治部卿、年賀礼。扇子二本人杉箱持参。寺中礼のため不对。
	1・4	大仏師左京、北山へ年賀礼。扇子三本人梧箱持参。相国寺にいたため不对。
寛文元 (61)	12・24	勸公に於て而辻伯耆・大仏師康着と会う。
2 (62)	2・8	大徳寺芳春院で春歴(浄土僧)に初めて会う。彼は大仏師康着の弟。
3 (63)	1・3	大仏師治部卿、年賀礼に来た由。
4 (64)	1・2	大仏師左京、北山に年賀礼。小杉紙三束・扇子三本人杉箱持参。承章病氣のため不对。
5 (65)	1・2	大仏師左京、晴雲軒に年賀礼。相对する、浮盃也。
6 (66)	1・2	大仏師左京法橋、年賀礼。扇子三本人箱持参。相对。
7 (67)	8・1	大仏師左京、相談のため訪れる。数奇屋手拭三片持参。相对。
	1・3	大仏師左京、年賀礼。扇三本人持参。不对。
	3・18	大仏師左京、訪問。門外で会う。
8 (68)	1・2	大仏師左京、年賀礼。扇子三本人杉箱持参。

明暦四年正月二日には康知が「内談之事」で鳳林を訪ねている。翌日には「大仏師左京法眼被頼事依有之、中川縫殿（貞長）殿江書書状遣也。大仏師左京今日亦被来、於妙心寺、而花園院之御木像造管之出入、於伝奏甘露寺、申入之趣、被演説也。」とあって、「内談之事」が妙心寺花園法皇像造管の出入についての斡旋依頼であることが判明する。

美術研究本『大仏師系図』では「明暦四年戊三月以勅定妙心寺九十四代花園法皇御影作」とあり、更に『正法山誌』にも「玉圓院華園法皇木像。大仏師左京康智法眼。奉勅命彫造」との記事がみえることから花園法皇像の造管は康知の申入れ通りになったものと思われる。

萬治二年正月二五日には、「大仏師左京法眼為年頭、於北山、被来、扇子箱二本・浅草海苔一折惠之。去八日從江府、上洛之由也。相對、浮盃、而浮〔點〕濃茶也。」とあって、康知が正月八日まで江戸へ赴いていたためこの日に年賀の挨拶があったことを記す。康知が江戸に下った理由はこの記事から窺えないが、美術研究本『大仏師系図』には康知が萬治二年二月に江戸城下、山王権現の本地堂薬師三尊像・護摩堂不動三尊像・御供所三面大黒像・惣門の金剛力士像二体・中門隨身像二体を製作した事が記され、康知は、これら幕府関係の造像に従事するため江戸に赴いていたものと思われる。

これ以後、『隔糞記』には康知に関する記述はなく、前述のようにこの頃に制作の場から離れたものと思われ、また康乗と目される左京、康看、康春についても主に年賀の挨拶程度の記事しかみえず、造像に関する事項には見出されない。

以上、『隔糞記』にみる康知、康看に関する造像事蹟をみてきた。そ

の結果、美術研究本『大仏師系図』等にもみる康知の項目からはまったく窺い得なかった様々な仏師の動きや造像、修復に関する事蹟を確認することができた。

金光寺僧を仲介者として鳳林承章に接触した康知・康看は、鹿苑寺、相国寺での造像、修復事業を行いながら鳳林の知遇を得、更には鳳林をも仲介者とし、京都の諸大寺に於ける造像事業に触手を拡げていく様子は、江戸時代造像界をリードした七条仏師ならではの姿である。

しかし、『隔糞記』の記述は、あくまで鳳林と仏師との交流を克明に示すにとどまり、仏師が手掛けた作品に対する評価は、無関心なほど乏しい。これは仏像といった特殊な事情があるものの、『隔糞記』にみる絵画作品の評価とは極めて対照的なものである。

また、江戸時代造像界の中核をなした七条仏師にとってもそれに甘んじ、良くも悪しくも「伝統」を保持し続けた姿勢がそこには窺えよう。それはまた時代の要請するところであって、江戸時代の絵画界における「狩野派」と同様に仏師として大成するならば、一度は七条仏師の門をくぐらねばならない状況を生みだし、後に康知の末裔は「惣本家」と記さねばならないほど、多数の「七条仏師」が出現する。またその反動として円空や宝山湛海などのいわゆる「僧名仏師」出現の背景にもなったのである。

### 三 その他の仏師 —— 友運・式部卿・右京 ——

さて以下、残りの仏師について簡単に述べておきたい。

まず伝右衛門入道友運について。友運は寛永二十二年五月朔日に「細工之小面一枚」を持参し、鳳林と観音像の台座について相談したことが記される。友運は「呼仏師之伝右衛門入道友運」と記され、鹿苑寺出入りの仏師かとも思われる。

この相談は五日にも行われ、一七日には「観音之右坐誂故、観音并枯木為持、遣仏師友雲〔運〕所也。」とあって観音像の台座を誂えるため、観音像と枯木を仏師のところまで持っていったことがわかる。このことから観音像は、前述した金閣二層「潮音洞」の聖観音像であることが判明する。台座は八月三日に出来上り、取り寄せられた。

次に式部卿。明暦四年正月二日に扇子三本入杉箱を持参し、年賀の挨拶に訪れ、鳳林と会って「浮盃」している。式部卿についてはこの記事しか認められず詳細は知られない。

続いて右京。正保二年三月二日に御礼のため、初めて鳳林を晴雲軒に尋ねている。この時、右京は伊万里焼平鉢一丁・同染付有蓋壺一ヶを持参している。更に寛文五年以降、右京は頻繁に鳳林を尋ねているが、挨拶程度の記事しかみえず、直接造像に関わるものはない。

しかし、当時高価な献上品の一つである伊万里産陶磁器を持参していることや寛文五年以降の訪問に際しては後藤宗也、酒家平左衛門・伊藤由庵ら京の町衆と同行している点からみて、市井の仏師でないと思われる。また康知、康看との関係を示唆する記事も見当たらないため七条仏師一門でないとも思われる。

今、相国寺を初めとする禅刹での造像対象を考える時、康知、康看の項で触れなかった要素として頂相彫刻が掲げられよう。

『隔裳記』が綴られた時期、京都の禅刹等で頂相（肖像）彫刻を製作した「右京」としては、洛陽大宮大仏師と称した大仏師吉野右京藤原種久・種次が上げられる。

彼等の造像作品としては以下のものが知られる。

承応二年（一六五三） 相国寺法堂夢窓疎石像

明暦元年（一六五五） 竜安寺昭堂特芳禅傑像

明暦二年（一六五六） 大徳寺養徳院実伝宗真像

明暦四年（一六五八） 竜安寺昭堂細川勝元像

寛文五年（一六六五） 醍醐寺三宝院弥勒堂聖宝像

寛文六年（一六六六） 天龍寺塔頭弘源寺玉岫英種像

寛文七年（一六六七） 醍醐寺三宝院弥勒堂空海像

寛文七年（一六六七） 醍醐寺地藏堂空海像

延宝元年（一六七三） 醍醐寺祖師堂聖宝・空海像

このことから吉野右京は専ら肖像（頂相）彫刻を製作したようで、像は風貌の外形を重視して写され、江戸時代の肖像彫刻の中でも出色の出来栄を示した作品であるとされている。これはまた頂相彫刻の生命である「対看写照」を旨する考えと矛盾しないものである。

また藤原種次は、その出自を「尊氏之大仏師印吉法印末孫」（醍醐寺三宝院弥勒堂聖堂・空海像）と記し、院派仏師末裔と称している。

南北朝～室町期の院派仏師は主に臨濟禅の名刹での造像を行い、慶派、円派仏師に抜きん出た位置を占めていたことや醍醐寺像の銘記に示唆されるように足利氏との関係が少なからず認められることが指摘されている。

振り返ってみれば、『隔蓑記』に登場する鹿苑寺、相国寺を初めとする禅刹は本来院派の造像基盤であったように思われ、「右京」が藤原種久・種次であり、銘記のように院派仏師末裔であるならば、前代の余韻をこの時期いまだ継続していたものと想像できる。

一方、慶派仏師の系譜をひく七条仏師にとっても既に江戸幕府の御用仏師の地位を確立したこの期において、禅刹は新たな製作の場のひとつであったように思われる。しかしながら、前代まで深く関わることのない禅刹への進出は、前述のように公家衆、僧侶を通じて接触を計っていたものと思われる。

このようにみれば、『隔蓑記』は、禅刹での活動の基盤、伝統を守る大宮大仏師とそこに新たに進出を計ろうとする七条仏師との攻防を我々に語りかけているようにも思われるのである。

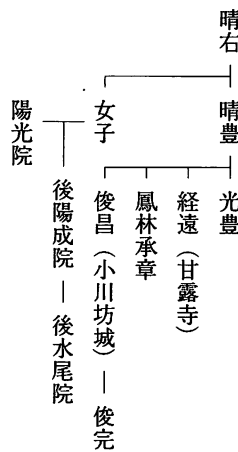
〔注記〕

- 1 いわゆる『大仏師系図』としては、現在七、八本が確認されるが、本稿で扱うのは、以下の諸本である。
  - ① 『本朝大仏師正統系図并未流』（『美術研究』一一一）
  - ② 『本朝大仏師正統系図并未流』（京都国立博物館蔵、『東洋美術』特輯日本美術史一〇）
  - ③ 『本朝大仏師正統系図并未流』（京都・金光寺旧蔵、毛利久「七条道場金光寺と仏師たち」、『佛教藝術』五九）
- 2 『隔蓑記』は赤松俊秀編（鹿苑寺刊 昭和三三―四二年）のものを使用

した。

3 近年の成果としては、『日本美術工芸』に『隔蓑記』にみる寛永文化の世界」と題した連載があり、多岐にわたる分野の執筆者によって総合的な分析がなされている（『日本美術工芸』六五五―平成五年）。

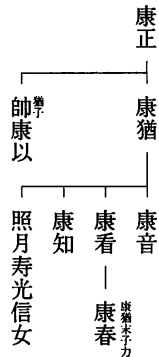
4 鳳林承章と後水尾院の関係を簡潔に示すと次の通り。



5 『隔蓑記』における萬治三年以降の「左京」に付された頭注は、康看とみなしている箇所がかなりある。康看が「左京」と名乗った例は管見では見出し得なかった。

6 佐藤昭夫氏は愛知・大樹寺徳川家康像の制作に関係する書状（『大樹寺文書』）にみえる「大仏師左京法橋康以」が、康正の猶子である帥康以に該当するとされている（『仏師康傳・康以と大仏師系図』、『ミュージアム』四〇〇 昭和五九年）。また京都・六波羅蜜寺閻魔像の胎内納入修理銘札によれば寛永八年に「大仏師左京」が、姪である照月寿光信女の三回忌の供養として同像を修復したことが記され（『日本美術院彫刻等修理記録Ⅵ』奈良国立文化財研究所 昭和五四年）、ここにみえる左京もその系譜からみて帥康以にあたるものと思われる。

以上の関係を後述する事項の一部と併せて図示すれば次のようになる。



- 7 康知の代数は『大仏師系図』諸本による。ただし、康知制作の京都・長講堂後白河法皇坐像の胎内銘には自らを「二五代」と称しており、康猶について大分・禪源寺釈迦如来像胎内銘（『宇佐国東の寺院と文化財』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 平成二年）では「一九代」と記した京都・長楽寺（金光寺旧蔵）時宗祖師像の修復銘札では「廿三代」と記しており、『大仏師系図』諸本掲載の代数とはずれが生じている。
- 8 毛利久「七条道場金光寺と仏師たち」『佛教藝術』五九 昭和四〇年。
- 9 『大仏師系図』諸本の康音・康知の關係が不自然であることについては既に江口正尊氏が指摘されている（江口正尊「仏師康祐造像様式論攷」『東日本学園大学教養部論集』一〇 昭和五九年）。
- 10 前掲注8。
- 11 松島健「長楽寺の時宗祖師像」『佛教藝術』一八五 平成元年。
- 12 後述する友運の事蹟もこの一環と考えられるならば、金閣の修復はまず二層目に安置された仏像修復が行われ、次に建物の修復が行われ、更にその後、一層目にある本尊の修復がなされたとも考えられる。
- 13 「疏」は「前代塔之柱立之疎」を鳳林が訂正し、この時新たに作り直したものである。
- 14 『泉涌寺史資料編』 総本山御寺泉涌寺 昭和五九年。
- 15 塔の落慶法要は承応二年六月一三日に焼失した内裏の再建完成をまつて明暦二年六月一六日に行われた。
- 16 本稿でのべた金閣の諸像は、昭和二五年七月二日の火災により金閣と

もに全て灰塵に帰した。

- 17 仏像を仏師宅まで運んで修理を行う例としては、浄土真宗本願寺派末寺の本尊阿弥陀如来像があげられる。阿弥陀如来像は京都の本山仏師渡辺康雲まで運ばれて修復されるが、これは修復後、西本願寺本山で検分が行われるためである。張洋一「康雲銘の阿弥陀如来立像について―浄土真宗寺院の歴史的側面―」『佛教藝術』二〇一 平成四年。
- 18 毛利久「長講堂後白河法皇御坐像について」『史迹と美術』一九三 昭和六年。
- 19 康知の二代後に続く康祐は、神奈川・清浄光寺尊任（南門）上人像の造立朱漆銘に「惣本家禁裏大仏師左京入道勅法印康祐」と記している。（『遊行の美術』 神奈川県立博物館 昭和六〇年）。
- 20 友運については「友雲」とも記されるが、ここでは友運に統一した。
- 21 この頃「式部卿」を名乗る仏師としては、埼玉喜多院天海僧正坐像を造立した式部卿がいる。像内墨書銘には「寛永<sup>癸未</sup>八月吉立／大仏師式部卿」と記される（久野健編『関東彫刻の研究』 昭和三九年）が、本稿の「式部卿」と同一人物かどうかは不明である。
- 22 以下、右京訪問の記事を『隔篋記』より抄出する。  
寛文5・1・15 後藤宗也・紗屋藤兵衛・仏師右京同道、為年頭、被来。  
寛文6・7・26 及晩、而仏師右京<sup>興林越</sup>来也。  
12・3 成田孫三郎・仏師右京来、（伊藤）由庵同（道）申也。  
12・11 午時招後藤宗也・三牧宗庵、（酒家）平左衛門・仏師右京・（伊藤）由庵、茶振舞也。  
12・21 （伊藤）由庵・右京見舞也。  
寛文7・2・2 仏師右京・酒家平左衛門・両替太郎兵衛来也。  
2・22 仏師右京見舞来。

9・10 松茸十五本充、遣南風〔部〕平左衛門<sup>典</sup>仏師右京也。

10・26 仏師右京来、外郎餅二竿惠也。来于晴雲軒也。

23 康正以後の七条仏師で「右京」を名乗る仏師としては、康正の猶子である「右京康英」がいるが、時期的に合わない。

24 藤原種久・種次については以下のものを参考にした。

『京都の肖像彫刻』 財団法人京都府文化保護基金 昭和五十三年。

福島弘道『醍醐寺彫刻所在確認調査について』『美学・美術史学科報』二

二 跡見学園女子大学美学・美術史学科 平成六年。

なお種久と種次については兄弟・親子とも考えられるが、未詳である。

本文事蹟年表中、「藤原種次」銘は醍醐寺三宝院弥勒堂像のほか大徳寺養徳院実伝宗像があげられ、その他は「藤原種久」銘。

25 清水真澄『院派仏師事蹟年表』『中世彫刻史の研究』 昭和六十三年。

山本 勉『南北朝・室町時代の彫刻』『日本美術全集 一 禅宗寺院と庭園』 講談社 平成五年。

同『品川・東海寺釈迦三尊像について』『三浦古文化』五五 平成六年。

26 康温・康音の製作とされる南禅寺山門釈迦三尊像・十六羅漢像の造営に  
おいても、「大仏師左京」が以心崇伝に造営の申し入れを行っている。『本  
光国師日記』寛永三年卯月八日条参照。

### 〔付記〕

本稿をなすにあたり堺市博物館井溪明、堺市教育委員会矢内一磨の両氏か  
らは、多大なご教示を頂きました。記して感謝いたします。

なお本稿は、鹿島美術財団の研究助成を受けて行っている「江戸時代仏像

彫刻の基礎的調査研究―七条仏師の作例を中心に―（平成六年度）の研  
究結果の一部をなすものである。